

全 國

商工新聞

長岡版

発行編集 長岡民主商工会
長岡市中沢町一六七・一
〇二五八・三三三・五九四八

2018年
9月3日
第1921号

原水禁世界大会へは電車・新幹線移動を含め4泊5日の行程。広島も暑い夏でした。

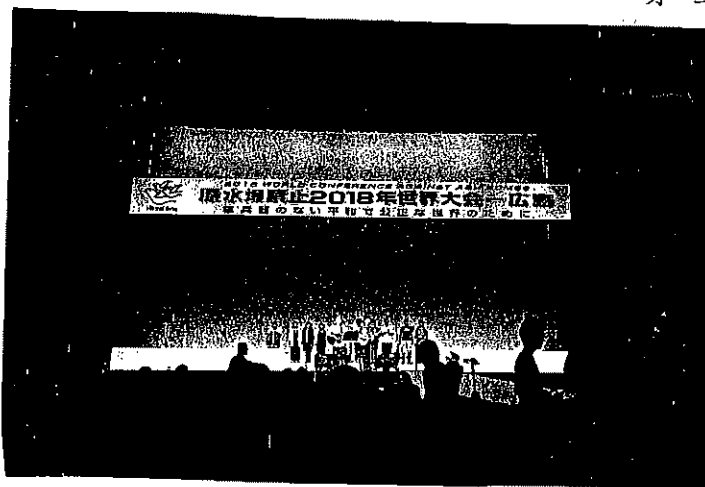
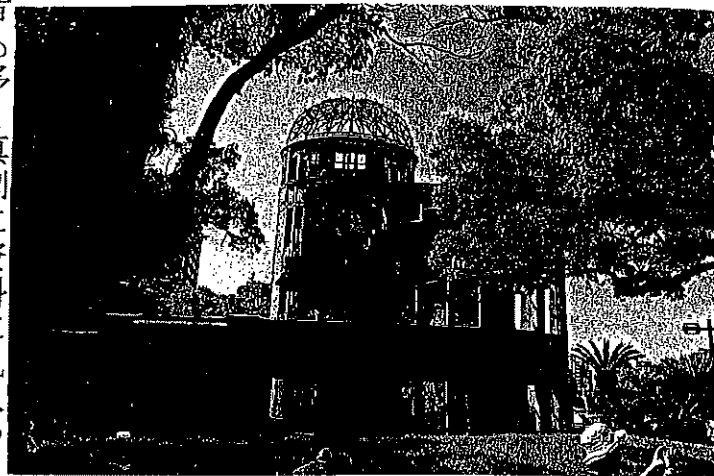
原水爆禁止世界大会に参加 核・戦争のない世界の実現に向けて未来を開いていく決意を新たに

8月4日から6日の3日間、広島で開催された原水爆禁止世界大会に新潟県から総勢22名の代表団が参加。長岡民商からは事務局・佐藤が参加しました。原爆投下から73年の夏、開会式に先立ち原爆ドームと平和記念資料館を見学。実際に自分の目で見る数々の資料は73年前に起きた出来事を詳細に物語ります。被爆直後の悲惨な街

並みや火傷を負った市民や兵士、原型をとどめない三輪車が残されていた他、門にすがって泣いていた男の幼児の死。これらのものを見るにつれ居たたまれない気持ちになりました。海外からの訪問者も多く真剣に資料に見入っている姿が大変印象的でした。

その後、世界大会の開会式に出席。主催者発表で5,000人が参加しました。核兵器禁止条約を推進するアイルランドの政府機関代表 ジェイミー・ウオルシュさんが「核廃絶を求める世論が力をくれる」とあいさつ。続いて登壇した総がかり行動実行委員会共同代表の福山真劫さんも

「核軍縮や脱原発で市民や団体が連携する必要がある」と訴えました。



世論を喚起し声を大きくすることが核兵器をなくしていく確実な一歩になると改めて感じました。また若い年代の参加者も多く見受けられ被爆者の高齢化が進む中で次の世代がこの出来事をきちんと伝承していかねければと考えさせられました。

大会2日目の8月5日はそれぞれが分科会に分かれました。私は「青年の広場」に参加しその中で被爆体験を持つ方のお話を聞くことができました。「一瞬の光が街をつつみ、灰色の空から黒い雨が降ってきた」爆心地の住民はほぼ即死だったといえます。一命を取り留めた被爆者も次々に死んでいく窮状が語られます。被爆から73年を経た今も原爆症の裁判は続いています。日本政府の検討会議は「黒い雨」の降雨範囲を広げようとしません。現在、82名の原告が闘っていますが高齢化で体の弱った大勢の人は訴訟に加わっておらず時間との闘いも続きます。1日も早い救済措置をとってほしいと願います。最終日となった8月6日は朝8時からの平和記念式典に参加しました。予想通りの多くの参加者で会場は溢れました(広島市の発表によると被爆者や遺族、世界各国の大使ら5万人が参列したそうです)。松井一実広島市長が平和宣言。未だ世界から核兵器が残る現状に警笛を鳴らし、唯一の被爆国として核兵器禁止条約の発効に向けた政府の積極的な姿勢を求めますが、つづいて挨拶に立った安倍首相は核兵器禁止条約の参加を明言しませんでした。アメリカの核の傘を安全保障上の後ろ盾とする日本。曖昧な言葉の羅列ではなく核のない世界に向けて進んでいく決意が強く求められます。

その後は世界大会の閉会式。6,000人が参加し「広島決議 広島からのよびかけ」を採択。核兵器禁止条約を1日も早く発効させ核兵器のない世界に被爆者、若い世代と共に未来を開いていく決意を新たにしました。新潟県の代表団をはじめ全体を通して若い世代の参加者も多く見受けられ将来に向けての希望を感じます。今回、広島で経験したことや自分の中に留めることなく周りの人たちに伝えていかなければなりません。

なお今回の世界大会参加に当たり皆さんからたくさんのご寄付を頂きました。ありがとうございました。